



## 香港便り その18

「も」

う一度、もう一度」師父（シーフ）は特別にフォームを直すわけでもなくただひたすらに僕に反復練習をさせる。プラスチック製のナイフを握りしめた手はしびれはじめ、もはや自分が正しい腕の振りをしていくのか分からなくなつた。それでも師父は刃先が描く軌跡を見つめたまま、「もう一度」というのみだつた。

香港バレエの「ロミオとジュリエット」はユニークだ。14世紀のヴェローナは1960年代の香港へと変わり、香港映画さながらのマフィアの抗争が描かれる。そこで僕らダンサーはフェンシングの代わりにカンフーで戦うのだ。僕の役はマフィアの首領、ナイフの両手使いだ。師父はカンフーの達人でナイフなど握ったこともないダンサー達を指導しに来了。

3時間くらい刃渡り30cmのナイフを8の字に振り回し、頭で考えることが困難になる程疲れたとき、師父は「好（ハオ）」といって次の動きを直し始めた。そのとき僕は何がよかったのかさっぱり分からなかった。

東洋武術の一つであるカンフーは型の習得を非常に重要視する。それは日本の武術や伝統芸能でも同じだ。そして西洋文化のなかでも型を重要視する芸術があ

る。バレエだ。特にロシアのバレエ学校ではセンチメートル単位でポジションを直され、ひたすら地味な反復練習を繰り返す。意外に思われるかもしれないが型の習得は頭で考えて学ぶ物ではない。型は道理や肉体の限界を越えたときに初めて、その末端に触れることができるのだ。もちろん指導者は体系や論理を知っているべきだが、学ぶ方は頭をなるべく真っ白にして、無駄に思えることが必ず身になると信じなくてはならない。古くさく聞こえるかもしれないが型の習得に効率を求めることが実は一番非効率的なのだ。

バレエダンサーを見てみると、いくら超絶技巧をしても型を感じられない踊りはどこか物足りなく見える。そして型破りな踊りは型を習得して初めて生み出すことができるのだ。

それは他の芸術でも言えることである。ピカソやカンディンスキーなど当時の前衛的な美術をリードした画家たちも若い頃は伝統的な技法による絵画を描き、それまでの絵画の歴史を踏襲した上で新たな分野を生み出してきた。現代のコンテンポラリーアートにおいて見シンプルで高度な技法が使われていないように見える作品もアーティストはこれまで先人たちに培われた表現方法を知った上で、あえて従来の

技法を使わないことを選んでいる。型を学ぶということはそれまで積み重ねられてきた歴史の渦を体の中に取り込むことなのだ。反骨精神を持ち新たなクリエーションをしていくにも反発する軸となるものが体の中になくと、生み出されるものもフラジャイルでおぼろげなものになってしまうだろう。

ロシアのバレエ学校に言葉も分からず放り込まれて以来久々にカンフーの師父に改めてバレエの踊り方、捉え方を学んだ気がする。舞台上以外で使う場所は分らないが、もしかするとプラスチックナイフの扱いもうまくなったかもしれない。

### Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。ヨーロッパ、北米、日本を含めさまざまな劇場における公演で主役を務めた。そして2021年7月より香港バレエ団に活動の拠点を移し、さらに活躍の場を広げている。立教大学中退。

カンフーマスターにバレエの踊り方を学ぶ？

文 高野 陽年

text by Yonen Takano

